タタール語をさがして
── タタールスタン共和国のタタール語事情 ──

中村　瑞希

中央アジア諸国でも出会う機会の多いタタール人（татарлар）は、ロシア連邦においてはロシア人に次ぐ規模の民族集団である。なかでも、モスクワから東に800kmほどの地点に位置するカザン市（Казан）はタタール人の中心都市であり、近年のロシア連邦内でも発展著しい都市として名を馳せている。

カザン市を首都とするタタールスタン共和国（Татарстан Республикасы）には、ロシア連邦内に居住するタタール人のうち4割ほどが居住しているという。タタール人の民族語はテュルク諸語のひとつであるタタール語であるが、ソ連期の徹底的なロシア語教育政策等によりロシア語化が進んだ。現在もロシア語を第一言語とし、タタール語は不得意とするタタール人は珍しくない。こうした現状を憂えたタタールスタン政府は、タタール語の振興を目指して様々な取り組みを行っている。市民生活に影響のある主な政策としては、義務教育学校におけるタタール語科目の必修化と、街中のタタール語看板の設置の推進が挙げられる。また、近年では若い世代を対象にしたソフトな政策として、御用歌手がポップ音楽やダンス音楽をタタール語でリリースし、政府系組織による補助金のもとタタール語啓蒙コンサートを街中で行うこともある。

こうした取り組みの成果もあり、少しずつではあるが、カザン市内でタタール語を見聞きする機会が増えつつある。本稿ではカザン市を中心に、タタールスタン共和国における現在のタタール語事情を簡単だが伝えたい。

1．課題の多いタタール語教育

タタールスタン共和国領内の義務教育学校では、ロシア連邦の国家語であるロシア語に加え、共和国憲法でロシア語と同等に国家語の地位を与えられたタタール語が必修科目とされている。タタールスタン共和国には、他の地域と同様にロシア語で全ての授業を行う義務教育学校のほかに、ほぼ全ての授業をタタール語で行うタタール語義務教育学校や、バシキー

ル語やウドムルト語を主な教育言語とする学校も存在する。タタール語教育は、タタール語を教育言語としない義務教育学校においても義務付けられている。

タタール語教育は、初等教育期間である第1学年から第4学年のあいだに行われ、地方差・学校差はあるものの、平均して週5コマほど実施される。しかし、タタール語の授業が設置されているがために、ロシア語の学習時間がロシア連邦内の他の民族共和国や州の義務教育学校よりも少なく、義務教育学校でのタタール語教育に対しては批判も多い。初等教育のロシア語学習時間の少なさを訴え、2011年にはニジネカムスク在住の親が訴訟を起こしたことで、社会的に大きな議論がなされた。複数の独立系メディアが伝えたところによれば、タタールスタン共和国領内で初等教育を受けた場合、ロシア語の授業時間数は約700時間であるのに対し、タタールスタン共和国以外の地域では平均して1,200時間だという。ゆえに、非タタール人のみならず、将来的に難関大学の受験を目指す児童を持つ親からも批判の声が上がっている。

義務教育学校におけるタタール語教育は、たしかに基礎文法レベルのタタール語を児童たちに教授することには成功した。しかし、5年生以降もタタール語教育を行う学校はタタール語学校を除けばほとんどなく、とりわけ大学受験を目指す子どもたちにとっては優先順位が低くなりがちである。タタール語を習得することで享受できる社会的・経済的利益は決して多いとは言えず、進学や就職に際してはもっぱらロシア語と英語の能力が求められる状況である。ゆえに、多くの場合、初等教育期間で培われたはずのタタール語は学年が上がるごとに忘れ去られ、結局義務教育を終える頃には挨拶程度がいいところ、といった具合である。

2. タタール語を保持する在外タタール人

諸説あるものの、世界中のタタール人の連帯を目的に設立された世界タタール会議（Бөтендөнья татар конгрессы）は、世界中に居住するタタール人の総数は650万人から680万人と推定している。ロシア連邦領内にはおよそ550万人のタタール人が居住しているため、100万人以上のタタール人がロシア連邦領外に存在する計算になる。いわゆる在外タタール人と呼ばれる人々は、中央アジア諸国など旧ソ連の国々を中心に、フィンランドや中国、アメリカやオーストラリア、トルコなどにも居住している。日本にも少数の在外タタール人が暮らす。戦前はロシア革命から逃れ、横浜や神戸を中心に多くのタタール人が一時的に滞在していた。筆者の曾祖父母も現在のバシコルトスタンからハルビンを経由して、横浜へとたどり着いたタタール人である。

様々な歴史的背景があるものの、世界中に散らばるように居住するタタール人のなかにはタタール語能力を保持する者も少なくはない。これに着目したタタールスタン政府は、世界

中のタタール人の若者を対象に、タタール語の運用能力や知識を競う大会の開催を決定した。2013年4月に第1回大会が開催された国際タタール語・タタール文学オリンピック（Татар теле һәм әдәбиятыннан халыкара олимпиада）は、以降も年に1度カザンで本選を行っている。年々ロシア国内外からの参加希望者が増えており、カザンでの本選出場をかけた予選試験の通過得点ラインは正答率が95%以上になることも珍しくはない。本選では言語知識のみならず、タタール民族舞踊や詩の朗読、民族音楽の演奏などの文化的素養も採点対象となり、非常に熾烈な競争が繰り広げられる。

とりわけロシア国外からの参加者は注目を集め、しばしばタタール語振興の広告塔として利用されがちである。二言語併用政策の賜物か、あるいは弊害か、タタールスタン共和国で耳にするタタール語は概してロシア語が混ざりがちであり、タタール語政策に携わる者にとっては悩みの種となっている。そこで、大会日程終了後には、日常的にロシア語を使わない遠い外国（дальнее зарубежье）出身の参加者を国営放送のスタジオに連れ出しては、彼らの話す混じり気のないタタール語を撮影し、それがのちに繰り返し地上波に流れされる。当然ながら、「遠い外国の同胞が美しいタタール語を話すのだから、我々も見習おう」という趣旨を伴って、である。筆者も第3回大会から第5回大会まで3大会連続で出場しているが、きわめて東アジア的な顔立ちゆえに格好の的となった。

そのほか国営放送では、世界各地でタタール語や民族文化の保持に努める同胞たちをクローズアップした番組「татарлар（タタール人たち）」を毎日放送している。この番組は、前述の義務教育学校におけるタタール語の授業でもたびたび教材として使用されているという。在外タタール人や、まれに外国人タタール語学習者をタタール語振興の広告塔として起用した効果のほどは定かではないし、人によっては鬱陶しいと感じる手法ではある。しかし、少なくともカザンではタタール語を話す異邦人は驚きとともに温かく迎えられるので、有効な手段ではあるのかもしれない。

3. タタール語看板設置の推進と、誤表記追放運動

2008年にカザン市が第27回夏季ユニバーシアード競技大会（2013年）の開催地に選定されると、タタールスタン共和国は多額の予算をつぎ込んで街の整備に力を入れはじめた。その際に、街中の案内板の多くはロシア語・タタール語・英語の3言語併記のものに取り替えられることとなった。同時に、通りに面した店舗の営業案内の表示や、設置される企業広告にタタール語あるいは英語を併記することを推奨し、実際に多くの店舗や企業がこれに従った。

しかし、徐々に問題が明るみに出る。店舗や企業が設置したタタール語看板・広告の多くに綴り間違いが発見され、社会問題と化した。2015年、タタールスタン政府は、共和国内で

出版・放送を行う国営新聞社など複数のメディアと、街中のタタール語の誤表記追放キャンペーンを共催することを決定した。「Татарча хатасыз（誤りのないタタール語）」と名付けられたこのキャンペーンは一般市民に対し、誤表記看板・表示等の写真と場所を特設サイトに投稿することを促したのである。もっとも多くの通報をした人にはiPhone 6を贈呈するとのお触れ書きが出たため、大きな話題を呼び、若い世代を中心に多数の市民がキャンペーンに参加した。カザン国際空港の案内板にまで誤表記が見つかるなど、キャンペーンが進むにつれて様々な問題が噴出したものの、実行委員会の発表によれば、2016年には少なくとも公共機関の誤表記は全て訂正されたという。一般店舗や企業の表示・広告等の誤表記に対しては、書面での通知が行われた。

図１　カザンの中心部で営業するバーガーキングの営業案内看板。主にタタール語で書かれているが、なぜか営業時間の表記だけはロシア語である。

4. 若い「タタール活動家」たちの登場

近年では、タタールスタン共和国内外でタタール語・タタール文化の啓蒙活動を行う活動家たちが現れはじめた。活動家の多くは20代から30代と若い。彼らは、前述した世界タタール会議の下部組織である「世界タタール青年フォーラム（Бөтендөнья татар яшьләре форумы）」の構成員で、近年はもっぱらSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）を利用したタタール語・タタール文化の振興活動を活発に行っている。ロシア国内でSNSが人気を得るに伴い、彼らの存在も広く知られるようになった。もっとも有名なリーダー格の青年は、日本でいうところの「会いに行けるアイドル」に似た存在で、若い世代のタタール人を中心によく知られている。

もっとも有名な活動としては、「Мин татарча сөйләшәм акциясе（私はタタール語を話します運動）」が挙げられる。これは活動家たちが音頭を取る、屋外タタール音楽コンサートのようなものである。活動に協賛するタタール人歌手たちが歌い、そして活動家たちは民族語や民族文化に対する熱い思いを語り、最後には一般参加者を巻き込んだタタールの遊びなどが行われる。

彼らの活動にはタタールスタン共和国教育科学省が多額の補助金を出しており、屋外開催の場合は非常に大規模な会となる。そのほか、各地の義務教育学校に活動家を派遣して特別授業なども行なっている。

5. カザン市内ではタタール語だけで買い物ができるか

筆者が2016年6月にカザン連邦大学で行われたCESS Regional Conferenceに参加することを聞きつけたタタールスタン国営放送が、撮影への参加を持ちかけてきた。カザンでもっとも大きな目抜き通りの商店街で、タタール語を使って買い物ができるかどうかの実験を行わないか、というものであった。筆者はちょうどタタール語が書かれたシャツを土産として買いたかったので、彼らの誘いに応じることにした。なお、撮影内容の初回放送は2016年6月8日に国営放送チャンネルで行われた。その後も何度か再放送されているはずだが、具体的な日時に関しては不明である。

「タタール語が書かれたシャツはありますか」－ татар сүзләре язылган футболка бармы монда? 初級レベルを終えていれば分かる平易な文章を口に、カザン市内最大の商業中心地・バウマン通り（Бауман урамы）の土産物店をカメラクルーと共に訪ねてまわった。合計で8店舗ほど訪れたが、うち5店舗で何らかの反応がタタール語で返ってきた。そのうち4店舗はタタール人が店番をしており、接客の全行程を通してタタール語での対応が可能だと話していた。残りの1店舗ではバシキール人の店主がバシキール語訛りのタタール語で対応してくれた。タタール語とバシキール語は互いに意思疎通ができるほど似た言語である。

タタール語が通じなかった3店舗のうち、2店舗では筆者の言葉を理解してくれたものの、対応は全てロシア語であった。店番はそれぞれロシア人とタタール人である。残りの1店舗では、理解さえままならなかったようで、何度も「タタール語はまったく分からないの」とタタール人の店員がロシア語で繰り返した。

表１　筆者が訪れた土産物店８店舗の店員について

	性別・民族・年代	接客で使用可能な言語
1	女性、タタール人、50代	ロシア語・タタール語。
2	女性、タタール人、20代	ロシア語・タタール語・英語。
3	女性、タタール人、40代	ロシア語・タタール語・トルコ語。
4	男性、タタール人、50代	ロシア語・タタール語。
5	男性、バシキール人、30代	ロシア語・タタール語・バシキール語・トルコ語。
6	女性、タタール人、30代	ロシア語・英語。タタール語は聞いて理解。
7	女性、ロシア人、40代	ロシア語。タタール語は聞いて理解。
8	女性、タタール人、60代	ロシア語・ドイツ語。

タタール人の中心都市たるカザンの目抜き通りにある店で、タタール語対応をしてくれないのは正直寂しいものを感じてしまう。観光客も多く訪れるカザンでは、タタール語以上に英語を話せる店員が優先的に雇用される傾向にある。しかし、近年はタタール語で対応可能な店の扉には特別なステッカーが貼られるなど、タタール語話者に優しい街づくりが地道に進められている。

なお、タタール語が通じやすい場所としては、当然ながらタタール料理店やタタール語劇場、タタール語の本を専門的に扱う本屋などが挙げられる。そのほか、タタールスタンが誇る大手スーパーマーケットチェーン「Бәхетле（ベヘトレ）」は、他のスーパーマーケットに比べればタタール語が通じやすい。ちなみに、筆者が訪れたバウマン通りには通称ドム・チャヤと呼ばれる老舗タタール料理食堂があり、非常に安価でタタール料理を味わうことができるのでお勧めである。

（筑波大学大学院人文社会科学研究科）